

「引揚者」文学から世界植民者文学へ

——小林勝，アルベール・カミュ，植民地喪失——

原 佑介

1. はじめに——「外地引揚派」の文学

生後間もなく植民地朝鮮に渡り、平壤で敗戦を迎え、数年の抑留生活の後日本に「引揚げ」た経験を持つ五木寛之〔1932-〕は、「長い旅の始まり——外地引揚派の発想」と題されたエッセイの中で、次のように述べている。1969年のことである。

アルジェリアの風土に対するカミュの入り組んだ感情が、私にはよくわかるような気がする。〈異邦人〉とは、単に観念上の問題ではなく、アルジェリアに生まれ育ったフランス人植民者が、国籍上の祖国に対する違和感と、生まれ育った風土の土地からは拒絶されているという、宙ぶらりんの人間、引揚者としてのカミュの立場そのものではないか。私たちはいわば圧制者の一族として、朝鮮半島にあったが、その中にも、日本本土における階級対立のステレオ・タイプはそのまま存在した。貧しいゆえに外地へはみ出し、その土地で今度は他民族に対して支配階級の立場に立つという、異様な二重構造がそこにはあった。¹⁾

五木寛之にとって、アルベール・カミュ〔1913-1960〕が描いた「異邦人」的状況は、決して機械文明社会に生きる現代人が抱える一般的状況を指すものではない。彼は小説『異邦人』を、植民地体験によって引き裂かれた「引揚者」としての自らのあり方と重ね合わせて読む。『異邦人』が日本に紹介されたのは、五木と縁の深い朝鮮が戦火に包まれていた1951年のことであった。この小説は熱狂をもって迎えられ、実存主義文学の傑作として位置づけられた。当時、全文が掲載された『新潮』6月号に解説を寄せた三島由紀夫や、いわゆる「異邦人論争」を繰り広げた広津和郎、中村光夫らが、戦後日本におけるカミュ研究の基本的方向性を定めることになる議論を盛んに展開した。しかし、五木のように『異邦人』から植民地という具体的状況を読みとろうとする議論は皆無であった。

それにしてもなぜ、ムルソーが暮らし、アラブ人を射殺して死刑宣告を受ける町が、パリではなく、マルセイユでもフランスの他のどの町でもなく、ましてや東京でもなく、他ならぬ植民地都市アルジェであったのかがまったく問われなかったのか——彼らの議論が文学研究として杜撰であるという以前に、これはきわめて奇妙な事態だと言わざるをえない。小説の時代や場所の設定を踏まえることは、文学研究の基礎部分であろう。ところが『異邦人』では、その前提的作業は無視された。むしろ、小説の性格によっては、それらを特定することがそれほど重要でなかったり無意味であったりする場合も数多くある。しかし、『異邦人』はそうではない。なぜなら、殺人を犯した男が殺人以外の理由で死刑に処されるという話は、植民地以外、この

場合たとえばパリでは到底成り立ちえないからである。ムルソーの物語が可能であるために、舞台は植民地でなければならず、殺されるのはアラブ人でなければならなかった。しかし当時の論者たちにとって、それは重要ではなかった。『異邦人』をめぐる積み重ねられた数多の解説や議論で、あれほどまでにムルソーがフランス人入植者の子孫であり、彼が殺すのがアラブ人であり、その場所が植民地であったということが無視されたという事実は、一体何を意味するのだろうか。そして、そうした単純な事柄に改めて着目したのが、ほかならぬ五木寛之という一人の「引揚者」であったという事実は？

五木寛之のエッセイ「長い旅の始まり——外地引揚派の発想」に注目したのは、「旧植民地文学」研究の先駆的存在である文芸評論家の尾崎秀樹〔1928-1999〕であった。尾崎は、「外地引揚派の発言——歴史の傷痕とからみあう作家たち」というエッセイを書いて、速やかに反応を示した。その末尾で尾崎は、「日本は敗戦後二十数年をへた今日でも、まだ旧植民地問題についての精神的決算書をまとめてはいない」と指摘した上で、「アジアの中の日本の位置を、旧植民地という分光器にかけてとらえなおす必要」を訴えた²⁾。このエッセイは、当時頭角を現していた五木寛之や安部公房〔1924-1993〕ら「外地」生まれ（幼少期に渡り当地で自己形成期をすごした者を含む）かつ「大正末から昭和一ケタにおよぶ世代」、すなわちおおそ10代で敗戦を迎えた作家たちの文学史的な重要性を論じたものである。自らもまた植民地台湾生まれであった尾崎は、生の根源に植民地体験が不可分に絡みついている「外地引揚派」の文学に、戦後日本が抱える植民地問題における可能性を見出していた。

本論文でも、五木寛之や尾崎秀樹が用いている「外地引揚派」という語を便宜的に借用するが、植民地生まれの日本人の植民地体験の本質からして、彼らの日本移住は厳密な意味での「引揚げ」とは言えない、ということは、常に念頭に置いておかなければならない。従来、植民者一世と二世以下の世代は、「引揚者」という概念の中で漠然と混同されてきた。この混同によって曖昧になるのは、後者固有の体験の歴史的意味である。「内地」に郷里を持つ一世と、「外地」を実質的な故郷とする二世以下の世代とでは、植民地との間に結ばれた関係はまったく異なるものであった。一世の場合、「外地」に根を張る意志を持っていた者も少なくはなかったが、結果的にはほぼすべての者が、帝國的出稼ぎ労働者とでも呼ぶべき末路をたどった。「引揚げ」という語は、外から内に戻るという意味を持つが、植民者二世の場合、「外地」と「内地」の関係はむしろ逆転していた。この逆転現象は、「引揚げ」た先である日本をむしろ異国のように認識し、同時にすでに消滅した植民地に原初的な愛着を抱いたりそこで培った感性を生き方の根底に据えたりするという彼ら独自の心的態度を生むこととなった。このように二重に孤立した状況を、五木寛之はカミュの文学的課題と重ね合わせたのである。多くの場合その状況は深い苦悩をともなうものであったが、それとともに、彼らの内と外のねじれは、日本の植民地主義を鋭く批判する独自の戦後文学を生み出す原動力ともなった。それは戦後日本文学史において重要な位置を占めるべきものであったが、現在に至るまで、ひとつの領域として認知されてこなかった。このことは、先に述べた『異邦人』の偏った読み方が通用してきたことと強い関連性を示すものであるように思われる——つまり、いずれの場合も、消えているのは植民地である。

それでは、あくまでも不完全な仮称であることを断っておいた上でだが、「外地引揚派」の文学という潜在的文学領域があるとした場合、どのような可能性が見えてくるだろうか。本論文

では、その歴史的意義を考えてみたい。

2. 小林勝と植民地朝鮮、戦後日本

最も代表的な「外地引揚派」作家は誰であろうか。言い換えるなら、その文学領域の本質を最も典型的に表わす文学を創造した作家は誰であろうか。

エッセイ「外地引揚派の発言」の中で尾崎秀樹は、代表的な「外地引揚派」作家として、五木寛之や梶山季之〔1930-1975〕、安部公房ら幾人かの名を挙げている。これに不服の声を上げたのが、彼らと同じ世代に属する在日朝鮮人二世の文学者呉林俊〔1926-1973〕であった——「どうしたわけか、この『外地引揚派』の中から小林勝は完全無欠に黙殺された。半句たりとも言及がなかった。」呉林俊は、小林勝の死後、その追悼論文において、自らが尊敬する「朝鮮人に関するすぐれた論評のある尾崎氏」でさえ「小林勝がその視野に凝集しなかったこと」に、「日本文壇」の欠陥を見た³⁾。小林勝が病死したのは、呉林俊がそう批判した数ヶ月前の、1971年3月のことであった。

尾崎秀樹は、「外地引揚派」の主要な特性である安部公房のような「グローバルな発想」や五木寛之のような「根なし草」的な発想の根源を、彼らの「〈旧植民体験〉という“原体験”に立ちもどってさぐり直さなければならない」と訴える⁴⁾。ところで、呉林俊がその名を挙げた小林勝こそが、おそらく近代日本の植民地体験を最も意識的に主題化した戦後文学を今に残した小説家である。知名度や作品の今日的影響力という観点からは五木や安部に比すべくもないが、植民地体験の文学化に最も深く、最も早くから、かつ最も持続的に取り組んだ「外地引揚派」文学者は誰か、という問いには、おそらく小林勝以外の名は挙がりえない。したがって、小林勝の文学の研究は、「外地引揚派」文学の歴史的意義を考察する上で不可欠な作業となるだろう。

小林勝は1927年、朝鮮半島南部の晋州で生まれた。長野県から朝鮮に渡った農林学校教師の息子であった。慶尚北道の安東、大邱で少年時代をすごした後、1944年春に陸軍予科士官学校に進学した。17歳で迎えた敗戦時は、陸軍航空士官学校で「特攻死」を目指す身であった。復員後は東京に暮らす。1948年日本共産党に入党、1949年早稲田大学露文科に転入学。1950年にはレッドパージ反対闘争に身を投じて逮捕され、大学を追放される。党の「武装方針」にしたがって過激化し、1952年6月25日、朝鮮戦争反対闘争で火焰壘を投げ、新宿駅近辺で現行犯逮捕される。約半年間拘留生活を送るが、獄中で朝鮮人強制送還問題を主題にした処女小説を執筆、発表する⁵⁾。出獄後本格的に創作活動を開始し、1950年代後半から植民地朝鮮を扱った小説を盛んに発表し始めた。1959年、朝鮮戦争時の「火焰壘事件」の有罪判決が確定し、約半年間懲役刑に服する。1960年代なかばに肺結核にかかっていることが判明し、肺切除手術を受ける。1960年代後半に再びペンをとり、命を削るようにして最後の文学的光芒を放つが、1971年3月、最後は腸閉塞で死亡した。小説集『フォード・一九二七年』〔1957〕、長編小説『断層地帯』〔1958〕、小説集『チョッパリ』〔1970〕、小説集『朝鮮・明治五十二年』〔1971〕などを残した。

日本と朝鮮の間に横たわる深い亀裂を凝視した小林勝は、1971年の死まで、苦痛に満ちた闘病生活による数年間の空白を挟みながらも、朝鮮を主題とする小説を書き続けた。その間彼もまた、ほかのすべての「外地引揚派」作家と同様、結果的に文学の元手となる様々な戦後の経

験を積んでいく。小林勝の場合、それは主に戦闘的な共産主義者としての政治運動であった。共産主義活動との往還の中で小林勝が描き出した植民地朝鮮は、その時点ではもはや地上に存在しない土地であった。彼は文学的想像力と多様な戦後の経験を活用しながら、失われた植民地を想起的に再現していった。戦後の諸経験は、小林勝の文学における植民地朝鮮や植民者、朝鮮人の表象にどのような影響を及ぼしたのだろうか。「〈旧植民体験〉という“原体験”」が小林勝の小説ではどのように文学化されたのかを、晩年の短編小説「万歳・明治五十二年」〔1969〕における植民者の孤立感の描写を分析しながら考察する。

3. 「薄気味悪い外国人」たちの声

1919年の「三・一独立運動」をテーマにした小説「万歳・明治五十二年」は、植民地において朝鮮人に包囲されていることを実感して恐怖におののく植民者の内面を克明に描く。タイトルにある明治52年というのは言うまでもなく架空の年であり、実際は大正8年すなわち1919年を指すが、これには1960年代後半の明治100周年を祝賀する雰囲気批判するという意図があった。内容は、朝鮮の田舎町で暮らす一人の日本人青年が、1919年3月の騒擾の中で、デモに参加していた朝鮮人を数人撃ち殺してしまう、という話である。成り行きに流されて現地住民を射殺してしまうという基本的な筋は、カミュの『異邦人』と同じである。

「内地」の郷里に嫌気がさした主人公の大村は、自由な生き方を求めて朝鮮にやってきた。しかしその思惑は当てが外れ、彼は結局、田舎町の朝鮮人実業学校の書記という地味な役職に収まる。たまたま流れついたその町に根を下ろす気など毛頭なく、未来の展望のない冴えない生活をしていることに強い不遇感を覚えていた。そのような中、1919年3月を迎えることになる。

3月3日の朝、投宿している小さな旅館で新聞を読む大村の目に、3月1日に起きた「朝鮮京城の不穏」を伝える一つの記事がとまる——「群衆大漢門に集り 隊伍を組んで市中を練る 憲兵専ら鎮撫に努む」(145頁〔以下、本論文における()内のページ数は、『小林勝作品集』第5巻(白川書院、1976年)〕)。大村は、なんとなく不安を抱いたまま学校に出勤する。しかし、朝鮮人生徒たちに別段変わった様子はなかった。仕事が終わると、大村はごみごみした朝鮮人集落に入り、その中の中国人街にあるなじみの食堂で食事をする。「中国人に目の前でチャチャ麵をつくって貰い、舌をやきながらそれを食べ、何か変わったことがあるか、とさりげなく聞いた。何時もおなじね、中国人のおやじが言った、この町何時も眠っているよ、ほんとうに退屈だよ、商売何年たっても大きく儲からないね」(147頁)。朝鮮人集落を通りぬけ、大通りに出て旅館に戻ってきたが、得体の知れぬ疲労感が大村の上ののしかかる。

学校を出てからずっと彼は緊張しており、眼に見えない何かに時折監視されているような気がしたのは、あれは一体何だったのだろうか、と彼は胸の中でくり返した、あれはおれの思いすごしなのだろうか、あれは本当に思いすごしなのだろうか、時々、気味の悪い眼の玉がべたっと背中にはりついたようなあの感じは。(147頁)

植民地住民からの眼差しにさらされていると感じる植民者の自意識を、小林勝は描き出して

いく。町に不穏な空気が流れる中、大村はある朝鮮人のことをふと思い出す。それは、「オムラさん、オムラさん」と言って大村を慕っていた実業学校の生徒金容泰であった。前年の夏休みのある日、大村は金容泰と一緒に洛東江で遊んだのであった。それは、今となってはあまりにも気楽な思い出であった。大村は、窮屈で抑圧的だった「内地」の郷里から自由な植民地に脱出できたという満足感に耽りながら、金容泰とともにのんびりと水泳を楽しむ。当時の大村には「無限の自由の土地」という植民地幻想がまだ残っており、朝鮮の風景と人々は、「内地」のせせこましい郷里の村とは対照的な、牧歌的な虚像の中に押しこめられる。郷里と植民地の町を対比させ、大村は感慨に耽りながら、郷里の小さな川とは比べ物にならない悠々たる洛東江の流れに身を委ねる（163-165頁）。

この回想のあと、朝鮮人群衆の示威行動がいよいよ本格化する。街は異様などよめきに包まれ、波濤のような「万歳、万歳」（ルビ原文。165頁）の喚声で揺れる。自警隊に加わった大村が警察署に駆けつけたところ、遠くのほうでついに銃声が鳴り響く。震える手で銃の安全装置を解く大村が心の中で叫ぶ——「おれはこんなことにまきこまれるために、故郷を脱出してきたわけじゃあないんだ、ちきしょうめ、どうしておれがこんなことになったんだ、おれに何の責任があるってんだ、ああ、ちきしょうめ、撃たなくてすんだらそれにこしたことはないんだ、おれには関係ないんだ、こんな山奥へ来ちまったのは、ほんとに偶然なんだ、しかし、やつらはおれを区別しはせんだろう、日本人めとって同じように来やがるだろう、ああ、やつらがおれめがけて襲撃してきたら」（166頁）。

突然、近くの路地から万歳の声上がる。太極旗をかざす喪服姿の朝鮮人群衆が、水があふれ出すように躍り出て、たちまちのうちに大通りを埋め尽くす。男たちは棍棒や鎌で武装していた。群衆は口々に万歳、独立万歳と叫びながら、警察署に近づいてくる。関の声がいっそう高まり、石が乱れ飛び、ガラスが次々に砕け散る。狂乱の中、銃声が鳴り響き、あたりに硝煙のにおいが立ちこめる。朝鮮人たちがあっけなく倒れ、悲鳴と怒号と泣き声が飛び交う中、群衆は後退を始める。その様子を、大村は現実感なくぼんやりと眺めていた。すべてが夢の中の出来事のようにはっきりしない中、大村はふと自分が持っている獵銃から硝煙のにおいを嗅ぎとる。そして、弾倉が空になっていることに気づき、愕然とする。そこで、群衆の先頭に立っていたのが自分の勤める実業学校の生徒たちであったことを思い出す。大村の足元には、確かに彼の銃から飛び出した葉莖が転がっていた。通りには死体が点々と転がっており、そのうちの幾つかにすがる女たちが泣き叫んでいた。茫然自失の大村の耳に、町のどこかであがる喚声と悲鳴、銃声がむなしく届く。

事件の後、もはや獵銃を手放せなくなった大村は、朝鮮人集落の中の中国人街にあるなじみの中華料理屋を訪ねる。これが「万歳・明治五十二年」の結末部分であるが、この場面にみんぎる緊張感は、小林勝文学の真骨頂であるといえる。

中国人のおやじがちらっと鋭い眼つきで大村の獵銃を眺め、すぐ眼もとを柔らげて、何時もの薄ぼんやりした鈍重な表情になった。しかし、おやじの一瞬の鋭い眼つきは大村に衝撃を与えた。その鋭さは、刀の刃だった。あれなんだ、と大村は入口につ立ったまま思った、あれがこの中国人の本当の顔なんだ、何時もの薄馬鹿のような顔はたぶんこいつの仮

面なんだ。(177頁)

奥の席には三人の実業学校の生徒がおり、そのうちの一人は、あの金容泰であった。飲食店への出入りは校則で禁じられているため、大村は自らの言葉に白々しさを覚えながらも彼らを叱責する。しかし彼らは、嫌悪感と敵意をむき出しにしてそれを無視する。大村は、「得体の知れぬ無気味さに気圧されそうになりながら」も、「お前たちも、騒ぎに加わっていたのか」と学生たちを追及する。すると、露骨に挑戦的な態度をとる彼らの顔に、「冷笑とも憎悪ともつかぬ暗い翳」が浮かぶ。金容泰はもはや、無邪気に大村を慕い、洛東江とともに泳いだあの金容泰ではなかった。

不意に暗くなったように感じて大村は後ろをふり返ってみた。入口のところに汚れた朝鮮服を着た長身の男が立っていた。その男は黙ってはいって来ると入口に近い席に腰をおろした。つづいて右腕に縲帯を巻いた、ひどく痩せた青年がはいってきて長身の男のそばに黙ってすわった。二人は何の注文もせずに沈黙したきり天井を見あげていた。中国人のおやじは相変わらず茫洋とした鈍い眼つきをしたまま鍋の前に立っており、大村が注文した料理を作っていた。大村は背中が寒々としてくる感じに襲われた。(178-179頁)

すぐにでも出て行きたい衝動に駆られる大村であったが、何も食べずに出て行こうとしたら何かが起こるような気がして、平静を装いながら、何の味も感じない料理を死にもの狂いで食べる。

突然、皿にかがみこんでいる彼の背後で、二人の朝鮮人が喋り出した。その聞きなれない異国の言葉は彼の心を荒々しくかき乱した。すると、三人の学生が烈しい口調で何やら喋りだした。それもまた朝鮮語であり、彼は完全に朝鮮語の渦の中に置かれた。洛東江の流れに身をまかせて下っていった時の金容泰の舌たらずの日本語はどこにもなく、あの日の金容泰の姿は消え失せ、朝鮮語を喋る朝鮮人がそこに居た。それは金容泰をはじめ、郷里にいた頃にくらべたならば多少は具体的現実的に理解することが出来ると大村が考えていた、その朝鮮人学生たちではなかった。一切の理解を拒絶した、正体不明の、薄気味悪い外国人がそこにおり、そして彼をとりまいて、理解できない言葉で喋っていた。恐怖が大村の全身を襲った。(179-180頁)

大村は、たどたどしい日本語を話す金容泰が、仮の姿で自分に接していたということ、それまで意識せずにいたのであった。激しい恐怖に駆られた彼は、食事を終えるやいなや、金容泰らと、後から入ってきた二人の朝鮮人の冷たい視線を感じながら、逃げ出すかのように店を出る。次の引用が、小説の最後の部分である。

頭上に青い空があり、街には人影がなかった。まだだ、と大村は震えながら思った、まだ安心出来ん、早くぬけ出さなくては。彼はつっぱってくる足を動かしてゆっくり歩いた。

もう少しだ、もう少しだ。体に汗が流れているのがわかった。もう少しだ、歩け、ふりむくな、歩け。その時、後ろから、低いがはっきりした日本語がとんできたのである。

ヒトゴロシ！

大村はその声に背中を撃たれたように、ぐらりとめった。たった今、この町を脱出して何処かへ、何の束縛も、恐怖もない何処かへ逃げて行きたい、という火のように烈しい衝動がこみあげてきた。脱出したい、おれは逃げて行きたい、しかし、何処へ、日本人であるおれはここからいったい何処へ。彼は血走った眼をすえて、歩いた。（傍点原文。181-182頁）

仲村豊は、小説「万歳・明治五十二年」を次のようにまとめている。「小林勝は、三・一独立運動に遭遇し殺人者となった青年を描くことによって、平凡な日本人が、植民地においてどのように支配者の鑄型に押し込められるかを、凝縮して表現した。植民地支配に無痛・無自覚であれば、自由への願望さえも植民地支配への通路となることを小林は克明にたどった」⁶⁾。

「何の束縛も、恐怖もない何処かへ逃げて行きたい」という大村の切実な叫びは、日本と朝鮮半島のあまりにも複雑な関係の前に深い絶望感を覚えていた晩年の小林勝自身の声と重なり合う。しかし、「日本人である」、そして何よりも植民者二世である自分に、のしかかる朝鮮の影におびえずともよい安息の場など存在しないということ、小林勝は自覚していた。戦後を生きる植民者二世を常に脅かす植民地の影の大きさと深さそのものが、「外地引揚派」としての小林勝の文学の大きな特徴を成す。1960年代なかば、小林勝は結核に侵された肺を半分近く切除した後の闘病生活において、投薬の副作用と不安感による精神錯乱に陥っていた。晩年の他の多くの作品と同様、「万歳・明治五十二年」に見られるような偏執狂的な朝鮮に対する執着と恐怖は、同じ植民地朝鮮生まれの後藤明生〔1932-1999〕から「朝鮮コンプレックス」と評されるほどであった⁷⁾。「内地」生まれの日本人からはいっそう異様に映るであろう植民地に対するコンプレックスは、「外地引揚派」の文学を他と大きく分かつ重要な特徴であるといえる。

4. 植民者二世と二重の異邦人感覚

小説「万歳・明治五十二年」が発表されたのは、尾崎秀樹が「外地引揚派の発言」を発表したのと同じ、したがって五木寛之が「長い旅の始まり——外地引揚派の発想」を発表したのと同じ、1969年のことであった。小林勝は、代表作の多くを1960年代後半に書いたが、このことは戦後文学史の脈絡に置いて俯瞰的にとらえるべきである。渡邊一民は次のように指摘している。「一九七〇年前後は、日本で育ち日本の植民地政策ゆえに母語を奪われた在日朝鮮人作家の作品が一斉に開花したばかりか、敗戦で引揚げてきた植民地二世の作家がほとんど同時に作品を書きだした、近代日本の文学史上画期的な意味をもつ時代であった」⁸⁾。

渡邊が指摘するように、この時期、植民地で自己形成期をすごした後日本に移住した日本人文学者が次々と頭角を現してひとつの潜在的文学領域を形成し、金石範〔1925-〕や李恢成〔1935-〕らの在日朝鮮人文学とともに、近代日本の植民地帝国体験の本質を多様に追究するという特筆すべき現象が起こっていた。植民地朝鮮生まれの「外地引揚派」だけでも、小林勝や五木寛之、

梶山季之のほか、村松武司〔1924-1993〕、森崎和江〔1927-〕、日野啓三〔1929-2002〕、後藤明生らがいる。彼らは主に1960年代から、それぞれの植民地体験と「引揚げ」体験、そしてそれらの上に積み重ねた戦後体験を、小説や詩、戯曲、エッセイなど様々な形で表現し始めた。しかしながら、すでに述べたとおり、植民地生まれの日本人文学者の戦後文学は、在日朝鮮人文学とちがいで、文学史的に市民権を得ることはついになかった。

主題の性格上、とりわけ小林勝ら朝鮮植民者二世の戦後文学にとって、同世代の在日朝鮮人文学との関係が重要な問題であることは論をまたない。しかし本論文では、在日朝鮮人文学との関連性についてはひとまず触れず、「外地引揚派」の文学が比較文学研究において示すもう一つの可能性を提起することとしたい。それは、きわめて20世紀的な現象であった植民地帝国の崩壊とそれにとまなう植民者の旧宗主国への「引揚げ」を共通項とする、20世紀の世界文学への接続の可能性である。20世紀の世界文学は、移動あるいは流動、逃亡あるいは離散する人間の文学を抜きにしては語れない。移民や難民、亡命者、ディアスポラといった単語を冠する文学、そして往々にしてそれらと隣接、あるいはそれらを包摂するポストコロニアル文学は、20世紀から今世紀にかけて、もはや最も重要な領域のひとつとなった。

たとえば野崎六助はその金石範論で、エドワード・サイードの著名なエッセイ「故国喪失についての省察」を引用しながら、済州島四・三事件に生涯をかけてとり組む金石範の文学を、ホロコーストに象徴される「二十世紀の歴史に特有の大量虐殺の〈グローバルな偏在〉」という近代世界史の文脈の上に位置づけて論じる⁹⁾。こうした視座は、野崎ならずとも在日朝鮮人文学研究においては決して珍しくない。金石範の文学を、植民地支配とその終焉が世界各地で産み落としたポストコロニアル文学、あるいはディアスポラ文学の流れをくむものとしてとらえることは有意義であり、かつすでに自明な段階にまで押し進められたものであろう。

ひるがえって「外地引揚派」の文学は、同じポストコロニアル文学の系譜に連なっているといえるにもかかわらず、その世界史的な位置づけはほとんどなされていない。在日朝鮮人文学はしばしばパレスチナ問題やホロコースト、アメリカ大陸のクレオールなどの結びつきの中で考察されるにもかかわらず、植民者とその末裔の文学の研究にはそのような広がりはない。それは、文学研究の分野において、植民地支配を行なった者およびその末裔の文学を、植民地支配を受けた者およびその末裔の文学と同列に論じてよいのか、という倫理的抑制が強固に働き続けてきたことの表れでもあるといえる。しかし、このように倫理観や旧宗主国的な罪悪感のゆえに前者を無視する態度は、それ自体が植民地主義と文学の関係を総合的に考察する上で障害となるだけでなく、後者のより深い理解をも妨げることになると言わざるをえない。在日朝鮮人文学が、植民地支配を受けた側のポストコロニアル文学の日本における代表的事例であるとすれば、当然「外地引揚派」の文学はその裏面を成すものであり、植民地暴力を行使した側のポストコロニアル文学の一支派として、きわめて重要な文学史的意義を持つはずである。

実際、「外地引揚派」の文学は、在日朝鮮人文学と深い影響関係にあっただけでなく、ある面において、戦後日本の植民地主義に対して一種の共同戦線を張っていたとさえ言うことができる。たとえば、五木寛之は、李恢成と「ぼくらにとっての“朝鮮”——体験をいかに作品にするか」〔1970〕という対談を行なっているが、その中で、「デラシネ」という語に集約される自身の文学的戦略について、次のように説明している。

「デラシネ」とか「漂流者」とかいうのは、マスコミのアクセントのつけ方がおかしいわけで、ぼくは自分の文章の中でそんな風に正面切って威張ってるわけじゃない。はっきり言えば、デラシネとは戦争や政治によって或る土地から引きはなされた民衆のことで、ぼくなりに規定しています。難民、引揚げ者、捕虜、追放者、流刑者、戦災孤児、そういったもののことです。大地から巨大な手でむしり取られた人間たちです。それに屈折したユーモアや自嘲をよそおった批判のニュアンスもくんでもらわなければ困りますね。要するに、自分に梶がないという実感を逆手にとって、世界の一流強国、皇国ニッポンにいや味を言うてるわけですから。¹⁰⁾

ここで五木がいう難民など「大地から巨大な手でむしり取られた人間たち」が置かれた状況は、20世紀固有のものとはいえないまでも、その規模の大きさと世界的共時性を見れば、きわめて20世紀的な現象——むろん20世紀で終息したとはいえないが——であるといえるだろう。続けて五木は、「自分たちの育った土地、自分たちがつながりのある土地から引き裂かれた人間の状況」は、いわゆる「引揚者」だけのものではなく、むしろ「現代の一つの典型としてある」と指摘した上で、次のように説明する。「戦争中、徴用工なりなんりの形で、無理矢理に日本の炭鉱につれてこられた朝鮮人、中国人グループがそうだし、それから例のイスラエルとアラブ、ああいう問題で難民としてよそへ送り込まれた連中がいるし、それから戦争中、東欧とか、ソ連地区へドイツの各地からユダヤ人が巨大な数で引き離されてもって行かれた。そういうふうな形で、ある多数の集団が、権力の手で、あるいは政治的状況の下で流亡する。方々に流れるというふうな状況がある。現時点では、大量殺りくと難民。この二つにぼくは大きな関心を持つものなんですけど。自分たちが好んでどこかへ亡命したとか、あるいは移民したということじゃなくて、ある事情で、人工的に分離されていくというふうな、そういう立場の民衆について考えたい。ちょっとぼく、うまくいえませんが、簡単にいうとこういうことなんですよ。つまり、被害者体験として引揚げを捉えたくないということなんです」¹¹⁾。

こうして五木は、自身の凄惨な「引揚げ」体験を引き起こした巨大な暴力を、日本の植民地支配の枠組みを超えた地球規模の同時多発的なものとしてとらえようとする。それはまた、自身の文学の世界的普遍性に対する予感的な自覚をもうながしていた。五木はまた、「異邦人感覚と文学」〔1975〕という対談の中で、カミュの『異邦人』について次のように指摘している。対談者は、同じ植民地朝鮮からの「外地引揚派」の日野啓三であった。

外国の小説家についても、なんとなく感ずるのは、たとえばカミュの小説は、フランスの中では何かしっくりこないところがあるんじゃないか。“エトランゼ”というのは引揚者ということだろうと……。

彼の場合の不条理というのは、彼がとても愛したアルジェの空とか海からは拒絶されていて、——つまり、今のアルジェリアの人間は、「何だ、おれたちはアルジェの海や太陽を愛するようやとりなく生きてきているのにそんなものエンジョイできたのは植民者の子弟の特権じゃないか」という発想ですから、カミュはそこから拒絶されている。とって傳統的なフランス、日本以上に保守的なフランスの中では、カミュは、ある違和感があっ

てそこを心の故郷とは感じられなかっただろうし、アルジェリアとフランス本土のあいだにあって、その中間で、どっちからも拒絶されているという感じ方が色濃くあったんじゃないか。その違和感から出てきた感覚が、「異邦人」という感覚だろう。あれは引揚文学じゃないかという発想を僕は持っているわけです。¹²⁾

『異邦人』を「引揚文学」、植民地からも本国からも拒絶されたピエ・ノワールの文学として受けとった日本人が、ほかにどれほどいたであろうか。カミュは、フランス人アルジェリア人植民者四世であった。おそらく世界で最も有名な植民者作家であろう。実存主義文学から植民地主義文学へとカミュ文学を大胆に覆したのは、オプライエンの先駆的研究を受けたサイードの「カミュとフランス帝国体験」である。このきわめて辛辣なカミュ論は、新鮮な衝撃とともに多くの反発も招いたが、植民者文学を研究する上で、やはり記念碑的な業績となったと見るべきであろう。サイードはカミュを評して、「帝国主義のアクチュアルな現実が、本来あってもおかしくないにもかかわらず、すっぽりと抜け落ちている作品を書いた小説家である」¹³⁾と手厳しく批判しているが、五木寛之の指摘する、本国からも植民地からも拒絶されているという植民者の二重の孤立感、あるいは「引揚者」の側が直面していた「帝国主義のアクチュアルな現実」のひとつであった。ところが、サイードのカミュ論には、ともすれば免罪符に堕しかねない植民者の苦悩への想像力を許容しない苛烈さがあり、彼はカミュの植民地小説読解にこうした視角を決して持ちこまなかった¹⁴⁾。しかしながら、「外地引揚派」の文学を戦後日本文学の枠組みを越えて広く開いていく上で、五木寛之の指摘はやはりきわめて重要な問題を含んでいるといわざるをえない。そしてこの五木の読み方は、『異邦人』がもっぱら実存主義小説として読まれてきた日本の文学研究の中で特異なものであった。実存主義文学の旗手というカミュ像一辺倒の読み方は、サイードの態度とはまったく異なる文脈で、ピエ・ノワールとしてのカミュのあり方を軽視するものであった。それはまた、敗戦当時、軍属を含めると700万に迫る膨大な人口を擁していた「引揚者」の体系的な研究がほとんど進展していない戦後日本の歴史研究、文学研究の構造的欠陥をも示唆するものである。

小林勝がカミュや『異邦人』に言及した公式的な文章はないが、彼の文学にもまた、五木寛之が表明したような二重の異邦人感覚が深く刻印されていたことは歴然としている¹⁵⁾。小説「万歳・明治五十二年」の大村は、「内地」に嫌気がさして植民地に出奔した挙句、そこで朝鮮人を殺してしまう。「内地」の郷里に彼が戻る場所もはやなく、かといって朝鮮人に囲まれて植民地で暮らし続けることもできない。彼が最後に追いこまれるこのどこにも逃げようのない状況は、きわめてピエ・ノワール的なものだといえる。

5. 書きえない植民地体験

大村の絶望の物語は、植民地においてどこにも行き場のないままで終わる。しかし、現実のピエ・ノワールたちが実際にたどったのは、慣れ親しんだ出生地を追放され、かつて親や先祖が後にしたよそよそしい祖国に向かう「引揚げ」の道であった。エッセイ「長い旅の始まり——外地引揚派の発想」の中で、五木寛之は次のように回想する。

引揚用のリバティ船で仁川の港を出る時、私は少しも嬉しくはなかった。たとえどのような立場であれ、半島の山河は私の育った土地であった。私は離れて行く赤土の山はだを、目をこらしてみつめ続けた。それは、どのようにそこに止まりたくても、私たち植民者の住むことを拒絶された土地であり私たちは追放された罪人として去って行くのだった。

私自身の中にある特徴的な思考法は、すべてこの引揚げ体験にもとづくのだろうと思う。内地に引揚げてきた私は、そこにおいて異邦人であった。方言を知らず、住むべき家も、耕すべき土地も持たぬ私たちは、内地において孤立していた。〈引揚者の子〉と呼ばれて嘲笑の対象になるたびに、私は半島を思った。だがそこは拒まれた土地だった。¹⁶⁾

「外地引揚派」の文学という領域を設定しうるなら、五木が明かしたこのような二重に屈折した自意識は、最も重要な指標となるだろう。小林勝はその領域に含むにふさわしい小説を数多く書いた作家であるが、それらにはことごとく生まれ育った土地から「追放された罪人」というトラウマが深く刻印されている。

五木寛之は続けていう。

私は物書きとして、私自身の出発点である植民地の生活と引揚げ体験について、ほとんど作品を書いていない。それは今もってその体験をそのまま客体化して描く気がないことと、それを掘り返すことがひどく不愉快だからである。

それを生のまま書けば、一種の体験記か、被害者物語になりそうな気がするのだ。私自身、あの悲劇的な極限状況を、一つの喜劇としてグロテスクなユーモアのうちに描き出せる方法が、発見できたとき、私はその仕事に取りかかってみたいと考えている。¹⁷⁾

五木寛之がこう書いたのは1969年のことだが、その後40年以上が経過した今も、まだ彼はままとった形では「その仕事」に着手していない。いまや齢80を越えた五木が、「植民地の生活と引揚げ体験」、とりわけ壮絶であった後者の暗い記憶を文学化し、凍てついた沈黙の中からすくい出すことはおそらくないだろう。他者がそれを作家の怠慢だと責めることは決してできない。

ところが一方、五木がこのように植民地体験の文学化の不可能性を打ち明けていたちょうどそのころ、小林勝は東京の片隅で、死の淵に瀕しながら、「万歳・明治五十二年」の執筆を含む最後の文学的苦闘に明け暮れていた¹⁸⁾。小林勝の場合、平壤で敗戦を迎えた五木寛之とはちがって、敗戦時にはすでに「内地」にいた（陸軍士官学校進学前は朝鮮南部の大邱に居住していた小林勝は、たとえ敗戦時に朝鮮にいたとしても、五木のように悲惨な「引揚げ体験」を味わうことはおそらくなかったであろう）。したがって彼の植民地小説は、劇的な「引揚げ」を描いた例外的な作品は二、三あるものの、基本的に植民地からの追放ではなくそこでの生活を主題としたものであった。いずれにしろ、小林勝は五木寛之が打ち明ける「ひどく不愉快」で孤独な作業を、絶望感の中でたゆまず続けたのであった。1952年、「火焰壕事件」で逮捕され、獄中で処女作を書いて以来、1971年の死までおよそ20年。戦後日本の文学史において、小林勝ほどその作業を粘り強く、あるいは一種の執念さえもって続けた作家はいない。その意味で、小林勝の

名が登場しないことをもって尾崎秀樹のエッセイ「外地引揚派の発言」を非難した呉林俊は、いくぶんかは正しい。

6. 故郷喪失後のピエ・ノワール

朝鮮人集落から抜け出そうとする大村を襲った生々しい恐怖感と罪障感、植民地からの激しい脱出願望は、植民地において自らが本質的に招かれざる客であるという彼の自意識の表れであるが、これは、かつての自分たちがそうであった、という小林勝の戦後の解釈の表現だといえる。とりわけ小林勝のような植民地生まれの日本人の地理感覚では、朝鮮は、たとえば北海道がそうであるように日本の一部である、という認識が一般的であった¹⁹⁾。当時未成年であった小林勝がすでに大村のようにまで突きつめた自意識を持っていたとは考えにくく、大村の罪人としての自意識は、戦後日本で朝鮮問題と向き合い続けた小林勝の文学的発展の結果であったと見るほうが妥当である。1927年生まれの小林勝は、「万歳事件」を実際に体験した大人たちから当時の恐ろしい話を聞かされて育ったが、その原型的記憶が戦後的経験の中で再構成されていき、大村のような自意識を持つ植民者像に結実していったのだと思われる。植民者である自分は植民地において本質的に悪である、という大村の徹底した自己認識は、彼が自らの手を朝鮮人の血で染めることによって逃れようのないものとなる。この物語構成の方式は、左翼運動を中心とした戦後日本における諸経験によって、小林勝が近代日本の植民者像をいったん根本的に解体し、再構築した結果であるといえる。植民者を描いた小説の絶対数そのものが少ないとはいえ、戦後日本においては、たとえば洛東江で泳いだ時点の大村のような、植民地での特権的生活を謳歌する無邪気な植民者を描くことは、そもそも不可能だったにちがいない。小林勝が植民地支配の是非を問うことはなかった。戦後日本で共産主義者となった彼にとってそれが非であることは自明であり、問題はそれがなぜどのように非であったのかを追究することだったからである。

これに対して、1世紀を優に超えるフランスによるアルジェリア植民地支配の破綻の過程に立ち会いながらもついにその終焉を見届けることのなかったカミュの描く植民者像は、より複雑な陰影を宿すこととなった。それは、最後までフランス人とアラブ人の共生を模索したカミュが、小林勝のように植民地支配は絶対的にまちがっている、という戦後的な前提を持たなかったためである。これについては、2編の重要な先行研究が参考になる。カミュの植民地小説における植民者像の変化を論じた茨木博史の論考と、カミュの後期文学に漂う「ポスト植民地的感性」を浮き彫りにした松浦雄介の論考である。

茨木博史は、初期に書かれた『異邦人』のムルソーと晩年の短編小説「客」のダリュというカミュ文学における二人の代表的な植民者の表象の差異に着目し、カミュをとり巻く歴史状況の激変にともなう彼の植民地小説の質的变化を精密に分析した。茨木によれば、カミュの植民地小説の舞台は、ヨーロッパ系住民が政治経済上のみならず人口比率の上でも多数派を占める沿海都市から、植民地支配が実効的に機能していない内陸部の砂漠地帯へと移っている²⁰⁾。これは、アルジェリアにおけるカミュの孤立感の高まりを示唆する。

茨木の作品分析で卓抜なのは、アラブ人の影に苛立ちながらもフランス的生活を謳歌する海

のムルソーと、アラブ世界の只中で完全に孤立し、脅迫にさらされる砂漠のダリュ（砂漠よりさらに辺境の「高原」）が共通してポケットに隠し持つピストルの象徴性に関する比較分析である。茨木は次のように指摘する。「二つのピストルはともにもともと彼らのものではない。[……]他人のものであったはずの暴力が、いつしか彼らの懐にも忍び込む。この二つのピストルは植民地という状況の中では誰もアラブ人への暴力と無縁であることはできない、ということを経験的に示しているとも解釈できよう。しかし、ピストルを手にしたあとの行動で、ムルソーとダリュは決定的に分かれる。ムルソーはアラブ人が刃物を抜いた瞬間、引き金を引く。一方ダリュは、殺人を犯したアラブ人と対峙する不気味さと恐怖の中にありながら、ピストルを引き出しにしまい、自らのうちに芽生えた暴力の可能性を必死に遠ざけようとする」²¹⁾。

アルジェリア民族独立戦争の只中であつたカミュの苦悩が鮮烈に示された後期の短編「客」は、カミュの植民地小説の中で最も重要な作品であるといえよう。辺境の高原の学校に独居するピエ・ノワールの教師ダリュのもとに、アラブ人を連れたコルシカ出身の老憲兵がやってくる。多忙の憲兵はダリュに、殺人を犯したそのアラブ人を最寄りの警察署まで護送するように命令する。憲兵はダリュにピストルを与え、アラブ人を残して立ち去る。アラブ人を押しつけられたダリュは、彼とともに学校で緊張感に満ちた奇妙な一晚をすごすことになる。簡単に逃げられるにもかかわらず、アラブ人はおとなしく夜を明かす。翌朝ダリュは、ピストルをポケットから出して机の引き出しにしまう。連行の途中、ダリュはアラブ人を放免しようとするが、男は自らの足で警察署に向かう。ピストルをめぐるダリュの葛藤は、故郷追放の危機の中で、カミュが支配者としての植民地暴力への誘惑と闘いながらアラブ人との和解を必死に模索する姿を暗示している。

ピストルに関する茨木博史のテキスト分析によって、小林勝の主人公大村の猟銃の象徴性もまた、鮮やかに浮かび上がる。小説「万歳・明治五十二年」は、大村が朝鮮人に向けて発砲する予感におののきながら猟銃の手入れをする場面から始まるが、その手入れは多くの場面をさみながら延々と続けられる。そしてこの猟銃は、典型的な植民地主義者として描かれる高利貸しの男から買いつたものであった。さらに朝鮮人の射殺後、大村はもはやこの猟銃を手放すことができなくなる。大村は絶望の中で次のように独白する——「おれは奴等が憎かったわけじゃない、おれは奴等に対しては別になんにも考えてはいなかったんだ、ただ、奴等が斧や鎌をふりあげ、おれがこれまで見たこともなかった太極旗をふりながら万歳、万歳とおし寄せてきた時に、眼のくらむほどおれはおそろしくなったんだ、自分が何をしているか全然わからなくなって、濃い霧がおれをおしつんだような具合になってしまったのだ、あの恐怖はおれの体の芯にこびりついて、これからずっと消えないに違いない。そしておれは多分一生、この猟銃を体のそばから離せないにちがいない……」。(175頁)

茨木博史の論考を受けて、松浦雄介は、カミュの晩年の短編集『追放と王国』において「安住の場所を出た主人公たちがその外に広がる砂漠を彷徨し、そこで他者と出会い、孤独に直面する物語は、アルジェリアのフランス人がマイノリティに転落し、そこから追放される未来の事態を予見的に示している」と指摘した²²⁾。松浦は、植民地主義の歴史的文脈の中でカミュ文学を批判的に読み直すという視点を一気に普及させたサイドのカミュ論に対して、小説の時期区分を怠っていること、時事的な文章と小説作品を読み分けていないという二点を中心に、

説得的に反論している²³⁾。また松浦によれば、アルジェリア独立戦争の最中に書かれたカミュの後期作品群は、アルジェリアの完全独立ではなく、本質的に植民地主義の誘りを免れないフランス・アラブ共同体建設の可能性に賭けざるをえないピエ・ノワールの宿命的な苦境を凝縮しようとしたものであった。それらは、サイードのというような植民地支配に固執する「力を奪われた植民地的感性」というより、むしろピエ・ノワールとアラブ人の「和解の不可能性」と、その結果として自分たちを見舞うであろう故郷喪失の切迫した予感に支えられていた²⁴⁾。

ところで小林勝は、カミュがその到来を予感していたポスト植民地の時代を生きた。小林勝の植民地小説は、カミュが『追放と王国』において示した故郷喪失後のピエ・ノワールの「ポスト植民地的感性」を、予見的ではなく同時代的に表現したものであるといえる。彼の後期代表作である「目なし頭」[1967]や「蹄の割れたもの」[1969]はまさに、植民地を追放されて本国に移住した後の日本版ピエ・ノワールが植民地の記憶にさいなまれる物語である。渡邊一民は、「一九六〇年に死んだカミュが、アルジェリアにおける幼年時代の追憶を甘美に描く『最初の人』を遺稿として残したのにたいして、「蹄の割れたもの」を書いた小林勝は、植民地移住民の末裔として未来へむかってカミュより大きく一歩を先んじていた」と述べている²⁵⁾。しかし、追放の予感を同時代的に文学化したカミュと、追放後の世界で、その追放の予感の歴史的意味を事後的に追究した小林勝は、同じ歴史的段階を生きる「植民地移住民の末裔」ではない。したがって、むしろこのように言うべきであろう——小林勝は、「植民地移住民」の最後の世代であったカミュの末裔として、カミュが死によって止めざるをえなかった歩みを引き継ぎ、大きく進めた、と。

金容泰のように一見従順のように見える朝鮮人が突然豹変して日本人に恐ろしい敵意を向ける、という筋は、小林勝の植民地小説で繰り返し用いられるパターンである。小林勝は、このような朝鮮人の変貌の過程を緻密に描くことで、いわば植民地支配によって消去されていた、あるいは戦後日本においてなお消去されている朝鮮人の顔と名前を見つめ直そうとしていたといえる。これに対し、カミュ文学におけるアラブ人は、『異邦人』から『追放と王国』に至るまで、名前のない存在であり続けた。『異邦人』では終始意思疎通の回路が遮断されたままであるが、「客」においてダリュは、短くたどたどしいながらも、アラブ人と、おそらくアラブ語で簡単な対話を重ねる。アラブ語が「地面の方からはいあがってくる」「一種の低音部」にしか聞こえないムルソーと比べるならば、これは注目すべき変化であろう²⁶⁾。それでも、アラブ人に名が与えられることはついになかった²⁷⁾。不気味なまでに表情の見えないアラブ人たちがフランス人たちの影にかすみながら行き交うムルソーの沿海都市とは対照的に、「万歳・明治五十二年」の大村の歩く植民地の町は、朝鮮人たちの声に満ちていき、最後はその怨嗟の声の一矢が大村の背中を射抜くまでに高まる。大村は、朝鮮人たちがしゃべる理解不能な異国の言葉に耳をそばだてる。朝鮮語に包囲されることによって、彼はそこが異国以外の何物でもないことを悟らされる。そして彼らの顔を凝視し、そのわずかな表情や眼差しの変化に病的なまでの敏感さを示す。小林勝の文学は、植民地追放の危機に瀕しながらもついにそれを体験することのなかったカミュの文学がたどりえた、そして晩年「客」においてその片鱗を確かに示した、未来のひとつの形であるといえる。それは、カミュと同じように自身の中に流れている植民地に対する愛着と懐かしさを突きぬけ、生まれ故郷である朝鮮を、自らが生まれ育ったその時から今に至るまで変

ならず他者の国であったものとしてとらえ直そうとする過程であった。自らの出自を根底から否定するその苦痛に満ちた道を歩んだ小林勝の文学は、単なる個人的な懺悔の文学にとどまることなく、帝国時代の朝鮮表象を戦後世界に持ち越したままである日本社会を告発する普遍的な文学へと発展していった。

渡邊一民は、カミュや小林勝が、文学作品と生き方そのものを通して提示する「旧宗主国の知識人が旧植民地の人々と連帯しようところみて挫折する物語」のうちに、「戦後の国際的な植民地戦争の時代における、先進国の知識人に共通して課せられた大きな問題のひとつを読みとらなければならない」と指摘する²⁸⁾。また松浦雄介は、先に引用した論考の中で次のように指摘しているが、ここに戦後日本において小林勝をはじめとする「外地引揚派」が直面していた文学的課題との共通性を見出すことができる。「ポスト植民地主義という言葉は、通常は植民地化された側から植民地主義を捉える議論の総称として用いられる。カミュは植民地化した側の人間であり、しかも彼が生きているあいだ、フランスによるアルジェリアの植民地支配は続いていた。しかし、入植者の側にも植民地主義をめぐる歴史的経験はある。彼らにとって植民地の独立とは故郷喪失であり、そして故郷から追われた彼らは新たな場所を目指して本国フランスへ引揚げていった」²⁹⁾。

7. おわりに——植民者文学を見る眼差しの交錯

植民者の植民地文学は、植民地後の世界でそれぞれの歴史経験を積んできた「植民地化された側」と「植民地化した側」の感性が多様に交わり合うことで、新たな読み方を引き出す豊かな可能性を秘めている。五木寛之が自身の感性とカミュ文学との近さを指摘してからおよそ30年が経過した1997年、日本語のカミュ論を発表した韓国人研究者イ・ヨンスクが、『異邦人』を一種の植民地文学として鮮やかに読み直してみせた³⁰⁾。また韓国では、パク・ホンギョが次のように指摘しているが、このようなカミュ文学の読み方は、先に挙げた五木寛之によるカミュ文学の異邦人性に対する共感的読み方とは大きく異なるカミュ像を提供する。

アメリカの植民地といつてよいメキシコの人々を殺す白人の「荒野の用心棒」がそうであったように、『異邦人』のカミュは同時に私にとって長い間名実共に「異邦人」だった。考えてみるとよい。その背景は、フランスの植民地であるアルジェリアだ。われわれの歴史に置き換えてみると、日帝末期の朝鮮で生まれ育った日本人青年が、暑い釜山の夏の海で、日差しのために通りすがりの朝鮮人を撃ち殺した殺人事件、といったところだ。そのような話にわれわれが果たして共感できるだろうか。それを現代にひっぱってきて、韓国人女性を殺したアメリカ兵の殺人犯の話だと見ても、同じことではないだろうか。³¹⁾

これは、ムルソーに殺されたアラブ人の側に立つサイドと相通ずる見方であるといえる。しかし大きく異なる歴史経験をそれぞれ持つアラブ人と韓国人の視野は、当然同じではない。韓国人の場合、植民地主義者としてのカミュ像は、必然的に日本人植民者批判へと向かう。パク・ホンギョは次のような仮定を通してカミュを批判する。

もしわれわれがアルジェリアのように、1945年の解放の前に8年間日帝に反抗する熾烈な独立戦争をしていたとしよう。その8年間の戦争で数多くの人が死に、傷つき、山川草木が荒廃し、戦争が終わった後何年も困難な状況に置かれたとしよう。

ところで、その戦争が始まった時、一人の日本人小説家が休戦を主張し、朝鮮人だけの独立ではなく日本人と朝鮮人が朝鮮で和を成して生きていくべきだ、と主張したとしよう。だとしたら、朝鮮人のうちで誰がその日本人小説家を支持しただろうか。また、戦争の後何年も困難の中で生きたからといって、休戦を主張したその小説家のビジョンが正しかったといえるだろうか。

さらに、その小説家の祖父が韓末、日帝の事実上の朝鮮侵略とともに朝鮮にやってきて、日帝が奪ったわれわれの地で農業にたずさわり、息子を生子、朝鮮生まれの彼が結婚し、朝鮮で暮らしながらその小説家を生子育て、民族解放戦争の前から家族が朝鮮で暮らしていたために戦争で殺される危険があるというのでその小説家がそんなことを言ったとしたら、誰がその話を素直に聞かだろうか。個人的に同情すべき余地がないわけではないだろうが、誰がそれを公人の話だというだろうか。カミュの場合が、まさにそうだったのだ。³²⁾

このような仮定を通してカミュ文学を批判的にとらえようとする視角は、日本人からはほとんど生まれえないものであろう。そして「外地引揚派」の文学がカミュの植民地文学と明らかに問題意識を共有している以上、このような批判的な見方は、「外地引揚派」の文学をも射抜く力を持つ。

カミュの立場を植民地末期の朝鮮に置き換えるパク・ホンギユの仮定は、次のようなさらなる仮定を導き出さう——もしその小説家が、遅れてきた小説家、すなわち朝鮮民族解放までの歳月は抑圧者の一族の子として朝鮮に生き、朝鮮から追放された後によく小説家となった男だったとしたら、彼は日本の植民地支配と朝鮮の独立をどのように振り返るべきだろうか、そしてまた、解放後の朝鮮とどのように向き合うべきだろうか、と。小林勝の場合が、まさにそうだった。彼はその間に、戦後日本における後半生をほとんど丸ごと費やした。本論文で見た「万歳・明治五十二年」は、彼のその営みが生み出したひとつの答えであった。

遅れてきた小説家——これは小林勝のみならず、すべての「外地引揚派」作家に当てはまることであろう。主観的には故郷である植民地を追放されたのが人生のどの段階であったかは、その後の彼らの文学的人生にとって決定的に重要であった。「外地引揚派」に含みうる作家たちのほとんどが1920年代後半から1930年代前半に生まれていることは、理由なきことではない。敗戦時、小林勝は17歳、五木寛之は12歳であった。10年、あるいは場合によってはわずか5年程度の遅れが、彼らの文学の基礎となる世界観、故郷や祖国に対する感覚に決定的な影響をおよぼすこととなった。

植民地で生まれ育った日本人の子供たちは、様々な場所で戦争と植民地の時代とその終末を見つめ、また様々な形で敗戦と植民地消滅の動乱をくぐりぬけた。五木寛之は、敗戦の翌月に母を失うことになるが、世紀をまたいでなお凍りついたままの「引揚げ」の記憶の中心には、おそらくこの出来事がある。その彼は後年、自身の「引揚げ」体験について次のように回想している。

私たちは敗戦後、非英雄的な栄光への脱出を強いられた。

東北地区から半島へ南下した難民の大群は、一つの民族移動のようなものだった。そこには、悲惨と滑稽の入りまじった集団的な極限状態があった。人々はデマと幻想のなかで〈内地〉に帰る日を夢み、まるで盲目的に一定の地点を求めて直進するネズミの大群のように進んだり、倒れたりした。

〈内地〉はすでに私たちにとって、いや、正確には大人たちにとって、一つのフェティッシュとなっていた。彼らは、現在の悲惨と不幸のすべてが、その約束された土地へ帰りつくことで解決すると信じ込んでいるようだった。

内地につきさえすれば——そんな文句を私たちは何度大人たちからきかされたことだろう。だが、私たち植民地で育った世代の少年たちには、それは全く実感のない呪文のように思われた。³³⁾

ここには、植民地からの壮絶な脱出の道行きにある「引揚者」たちを、おぞましくも滑稽な「ネズミの大群」のようにとらえる少年の冷めた眼差しがある。この冷めた眼差しは、おそらく彼が12歳であったからこそ戦後も保存しえたものであった。五木寛之はこの文章をリスボンで書いた。その前日、彼は「マドリッドの〈コロンの広場〉という場所に立って、コロンブスの像を眺めていた」³⁴⁾という。植民地主義の始まりの象徴であるコロンブス像を眺めるこの眼差しに、数百年にわたって全地球的に猛威をふるい続け、今なお世界を根底から規定している植民地主義との関連において、植民者二世としての自らの生をとらえようとする意志を読みとることができる。

最後にもう一度、尾崎秀樹の声に耳を傾けてみよう。尾崎はいう——「私も五木と同様、昭和一ケタ生れの外地派だ。台湾で生れ、育ち、八月一五日をそこで迎えた。それだけに彼の発想の根元にわだかまる、うずきともうめきともとれる内心の声が痛いほど理解できるように思う。とくに『植民地における支配民族としての日本人の中にも、二つの階級が存在していたこと』を指摘する彼の指先のふるえを、私は実感する。しかしその傷がふかければふかいだけ、そのことについて生な体験告白ができないようなためらいが働くのも事実なのだ」³⁵⁾。

本論文でとり上げた小林勝は、植民地体験の告白に対する「外地引揚派」の「ためらい」を最も決然とふりきり、質量ともに抜きん出た量の「うずきともうめきともとれる内心の声」を書き残した植民者二世の小説家であった。しかし、その作業を行なったのは小林勝だけではない。五木寛之に見られるとおり、多くの「外地引揚派」が、時に断片的にでも、それぞれの植民地体験を凝縮した声を発していた。彼らの声を、彼らだけが理解できるものとして放置してはならない。

注

- 1) 五木寛之『深夜の自画像』（文春文庫、1975年）38頁（同書所収時の題名は「長い旅への始まり——外地引揚者の発想）。エッセイははじめ、上下に分けて1969年1月21日および22日付毎日新聞に掲載された。
- 2) 尾崎秀樹「『外地引揚派』の発言」『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971年）328頁
- 3) 呉林俊「亀裂の塔から降りるもの」『新日本文学』（1971年7月号）118頁

- 4) 尾崎秀樹前掲書, 325-328 頁
- 5) 「ある朝鮮人の話」『人民文学』(1952年12月号)
- 6) 仲村豊「受け継がれるべき歴史への視座」『社会評論』(1997年8月号) 94 頁
- 7) 後藤明生「グロテスクな〈記憶〉」『文芸』(1970年7月号) 207 頁
- 8) 渡邊一民「解説」梶山季之『族譜・李朝残影』(岩波現代文庫, 2007年) 225 頁
- 9) 野崎六助『魂と罪責』(インパクト出版会, 2008年) 155 頁
- 10) 五木寛之, 李恢成「はくらにとっての“朝鮮”」『文学界』(1970年11月号) 215 頁
- 11) 五木寛之, 李恢成同対談, 215 頁
- 12) 五木寛之, 日野啓三「異邦人感覚と文学」『文学界』(1975年4月号) 190-191 頁
- 13) エドワード・W・サイード『文化と帝国主義』1 (みすず書房, 1998年) 313-314 頁
- 14) サイードはあるインタビューの中で, カミュ文学の一般的な流布の状況について次のように不満を表明している。

「『アルジェリア民族などというものは存在しない』——彼はムスリムの帝国主義を公然と非難しました。人間の状況に対する偏見のない観察者どころか, カミュは植民地の証人なのです。苛だたいのは, 彼が決してそんなふうには読まれないということです。僕の子供たちは高校生と大学生ですが, 最近, それぞれフランス語の授業で『ベスト』と『異邦人』を購読しました。息子と娘のどちらの場合も, カミュを植民地という文脈から切り離して読まされました。カミュが荷担していたこの異論の多い歴史については, 何の指摘もなかったのです。カミュは, ただの中立的な観察者ではありません。彼は筋金入りの反FLN派だったのです。」〔ルビ原文。『ペンと剣』(ちくま学芸文庫, 2005年) 108 頁〕

- 15) たとえば, 朝鮮戦争時の「火焰臺闘争」とその挫折を活写した長編小説『断層地帯』〔1958〕の中で, 小林勝は自身の分身である主人公の獄中手記という形で, 次のように書いている。

「ぼくの肌には朝鮮の太陽と風とがしみついていた。ぼくは, あそこの土と空気とで出来上ってしまったのだ。ぼくは, 自分がうまれ育った土地にくらべて, あまりにもせせこましい, 山や畑, 人々の感情や顔つきを嫌悪した。しかし, だからといって, もうぼくの帰って行くべき郷里はないのだった。それはもう永久にないのだ。それは他国なのだ。ぼくはあそこへもし仮りに帰ることがあるとしても, あそこの人々にとってぼくは帰ったのではなく訪れたのであり, そこではぼくは異郷の人間に過ぎない。そして日本の山の中の村でも, ぼくは他所者であり, 帰って来たのではなく, やって来た村人は考えているのだった。故郷を喪失した人間。永久に喪失した人間。その意識は, ぼくをしますます, 記憶の中の朝鮮へ歩かせていった。ぼくは新しい朝鮮を知らない。ぼくが戻って行くあの朝鮮は古い朝鮮, 永久に地上から姿を消し, 既に歴史上の存在となり終った朝鮮である。」〔『小林勝作品集』2巻(白川書院, 1975年) 172-173 頁〕

- 16) 五木寛之『深夜の自画像』(文春文庫, 1975年) 40 頁
- 17) 五木寛之同書, 41 頁
- 18) 1969年当時の小林勝の姿を近くで見ていた愛沢革が, 作家の家を訪ねた時の様子を次のように証言している。

「玄関を上がってフスマを開けるとすぐ六畳間で, そこが居間兼彼の書斎, なのだ。小林勝は酔っておった。酔っばらってはいなかったが。泥酔状態の小林勝をぼくは見たことないが, かなり酒を飲んで体を重そうに畳にあずけて坐っている, というのがぼくの眼に焼きついている小林勝だな。眼の焦点が合いくくなっていて, ヒュウ・ゼエ・ヒュウ・ゼエと音をたてて荒い呼吸をしている。ああいうのを酒焼けとかいうのか, 少し薄暗い顔で。眼が落ち窪み, 頬はこけ, 煙草を持つ手は少し震え, 人さし指と中指の先が黄土色になってる。彼が吸っていた煙草はフィルターのないショート・ピースで, それを思いきって深々と吸ってはタメ息みたいにフワッと吐く。二服か三服吸うとすぐ火を消して, それを大きなガラスの灰皿の縁に, 土堤に丸太棒を横たえるみたいにきちんと置いていくのだ。」〔愛沢革「小林勝・徐兄弟・金芝河」『新日本文学』(1975年9月号) 89 頁〕

- 19) 小説「瞻星」〔1965〕の中で、小林勝は、植民者二世にとっての植民地朝鮮を次のように説明している。

「この植民地うまれのいわば二世たちにとっては、朝鮮の独立などということは、この世に絶対に起こり得ない、架空の物語にすぎない、そこが植民地へのりこんで来た、軍人たち、官吏たち、警官たち、銀行家たち、商人たち、高利貸たち、教師たち、僧侶たち、鉄道員たち、一世とは根本的にちがっているところだった。彼等一世たちは、朝鮮が植民地化されてまだ三十余年を経ているにすぎないことを、直接体験した独立運動の生々しい出来事と共に知っていた。しかし、二世にとっては、朝鮮は彼等が生れた時から日本であった。ここでは三十年という年月などには何の現実感もない。彼等は日本に生まれていた。だから、それは日本内地と共に永遠であった。」〔『小林勝作品集』5巻（白川書院、1976年）286頁〕

このような感覚は、ほかの植民者二世も報告している。たとえば、小林勝と同年に大邱に生まれた森崎和江は、盧溝橋事件が勃発したころ小学校4年生であったが、「この年もその前年も福岡日日新聞社主催の、西日本・朝鮮児童スケッチ展があり、子どもの世界も朝鮮は西日本文化圏にふくまれているのを感じさせ、戦争とともに朝鮮は西日本のみならず日本内地の前衛的な気分になるのだった」と回顧している〔『慶州は母の呼び声』（洋泉社、2006年）113-114頁〕。

- 20) 茨木博史「『異邦人』から「客」へ」日本カミュ研究会編『カミュ研究』6号（青山社、2004年）35-38頁

21) 茨木博史同論文、40頁

22) 松浦雄介「脱植民地化と故郷喪失」『Becoming』（BC出版、2006年）18-19頁

23) 松浦雄介同論文、1-8頁

24) 松浦雄介同論文、7-8頁参照。

25) 渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮』（岩波書店、2003年）182頁

26) カミュ『異邦人』（新潮文庫、1995年）77頁

- 27) 1934年から1940年にかけて、アルジェリアで数次にわたり長期的に学術調査を行なった経験を持つ民族学者ジェルメース・ティオンが、アルジェリア独立戦争が勃発した1954年に当地を再訪した際の見聞について、次のような証言を残している。

「コンスタンティーヌ行きの列車にはほとんど乗客はいなかったが、そのわずかな乗客は『ピエ＝ノワール』だった（この表現を一九三四年から四〇年までのあいだ一度として聞いたことはなかった）。彼らはいろいろなことを話していたが、とくに好んで話題にしていたのは、自分たちの敵手である住民たちについてであり、その住民たちを彼らはアラブ人としか呼ばなかった——だがその住民たちも、彼ら以上にアラブ人であるわけではなかった。というのも、マグレブ諸国のイスラム教徒の多数は実はベルベル人であるか、アラブ化したベルベル人だったのであり、他方アルジェリアの他の住民は往々にしてマルタ島か、スペイン南部からやってきたユダヤ教徒、あるいはカトリック信者であり、したがって、やはりマグレブ地域出身のイスラム教徒によって長いこと占領されていた地方からやってきていたからだ。」〔榜点原文。『ジェルメース・ティオン』（法政大学出版局、2012年）283頁〕

28) 渡邊一民前掲書、177-178頁

29) 松浦雄介前掲論文、8頁

- 30) イ・ヨンスク「アジアの植民地から読むアルベール・カミュ」『異邦の記憶』（晶文社、2007年）18-38頁。同論文の初出は、『小説 TRIPPER』（朝日新聞社、1997年10月秋季号）。この中でイは次のように指摘している。

「カミュの夢みた『フランス＝アラブ共同体』という理想は、現実には植民地支配のあらたな言い訳になったかもしれない。実際、フランス政府は、アルジェリアがフランスと『不可分の一体』をなすという考えを捨てようとせず、チュニジアやモロッコの独立を認めたのちも、アルジェリアの独立をなかなか許そうとはしなかった。カミュのことは、現実の政治の世界では、こうしたフランス政府の方針と歩調をあわせることになってしまった。したがって、カミュは、思想的にも政治的にも敗北を運命づ

けられていたともいえる。

ところが、小説のなかでは、カミュはフランス人とアラブ人の連帯をえがくことができなかった。これは、カミュが小説では現実主義を、評論では理想主義を、といった意図的な作法の使い分けを意味するものではないだろう。文学は思想と政治の敗北ののちも生き残るものだ。カミュの文学は、二重に追放された存在である『アルジェリアのフランス人』の生を、せいっぱいの誠実さで描ききったものとして記憶されなければならないだろう。」〔37頁〕

- 31) 박흥규 『카뮈를 위한 변명』(우물이있는집, 2003년) 20-21 쪽. 翻訳は本稿筆者(以下同じ)。
- 32) 박흥규 위의 책, 27 쪽
- 33) 五木寛之『風に吹かれて』(角川文庫, 1970年) 123-124頁
- 34) 五木寛之同書, 128頁
- 35) 尾崎秀樹前掲論文, 328頁

参考文献

- 愛沢革「想像力の基点としての〈朝鮮〉——小林勝論・序説」『新日本文学』(1973年11月号)
- 愛沢革「小林勝・徐兄弟・金芝河——丁尚星〈運動〉を語る」『新日本文学』(1975年9月号)
- 安宇植「小林勝と朝鮮」日本アジア・アフリカ作家会議編『戦後文学とアジア』(毎日新聞社, 1978年)
- イ・ヨンスク「アジアの植民地から読むアルベール・カミュ」『異邦の記憶——故郷・国家・自由』(晶文社, 2007年)
- 磯貝治良「朝鮮体験の光と影——小林勝の文学をめぐる」『新日本文学』(1981年10月号)
- 磯貝治良「原風景としての朝鮮——小林勝の前期作品」『季刊三千里』29号(1982年)
- 磯貝治良「照射するもの、されるもの——小林勝の後期作品」『季刊三千里』30号(1982年)
- 磯貝治良『戦後日本文学のなかの朝鮮韓国』(大和書房, 1992年)
- 五木寛之『深夜の自画像』(文春文庫, 1975年)
- 五木寛之, 李恢成「ぼくらにとっての“朝鮮”——体験をいかに作品にするか」『文学界』(1970年11月号)
- 五木寛之, 日野啓三「異邦人感覚と文学」『文学界』(1975年4月号)
- 茨木博史「『異邦人』から「客」へ——二人の植民者の肖像」日本カミュ研究会編『カミュ研究』第6号(青山社, 2004年)
- 呉林俊「亀裂の塔から降りるもの——小林勝の接点と持続について」『新日本文学』(1971年7月号) 118
- 尾崎秀樹「『外地引揚派』の発言——歴史の傷痕とからみあう作家たち」『旧植民地文学の研究』(勁草書房, 1971年)
- カミュ・アルベール『カミュ全集』10巻(新潮社, 1973年)
- カミュ・アルベール『異邦人』(新潮文庫, 1995年改版)
- 川村湊「小林勝外伝」『文学界』(1996年5月号)
- 川村湊『満州崩壊』(文芸春秋, 1996年)
- 小林勝『小林勝作品集』全5巻(白川書院, 1975-1976年)
- 後藤明生「グロテスクな〈記憶〉——小林勝『チョッパリ』」『文芸』(1970年7月号)
- サイド, エドワード・W『文化と帝国主義』1(みすず書房, 1998年)
- サイド, エドワード・W他『ペンと剣』(ちくま学芸文庫, 2005年)
- 斉藤孝「小林勝と朝鮮——一つの思い出」『季刊三千里』(1984年秋号)
- 高澤秀次「小林勝論」『言語文化』17号(明治学院大学言語文化研究所, 2000年)
- 高澤秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』(平凡社新書, 2010年)
- ティオン, ジェルメース『ジェルメース・ティオン——レジスタンス・強制収容所・アルジェリア戦争を生きて』(法政大学出版局, 2012年)

「引揚者」文学から世界植民者文学へ（原）

- 仲村豊「受け継がれるべき歴史への視座——小林勝『万歳・明治五十二年』」『社会評論』（1997年8月号）
- 西成彦「日本語文学の越境的な読みに向けて」『立命館言語文化研究』22巻4号（立命館大学国際言語文化研究所，2011年）
- 野崎六助『魂と罪責——ひとつの在日朝鮮人文学論』（インパクト出版会，2008年）
- 朴裕河「小林勝と朝鮮——「交通」の可能性について」『日本文学』（2008年11月号）
- 朴裕河「引揚げ文学論序説——戦後文学のわすれもの」『日本學報』81号（韓國日本學會，2009年）
- 朴裕河「後藤明生『夢かたり』論——内破する帝国主義」『日本學報』86号（韓國日本學會，2011年）
- 本田靖春「インタビュー・ルポルタージュ 日本のカミュたち——『引揚げ体験』から作家たちは生まれた」『諸君！』（1979年7月号）
- 松浦雄介「脱植民地化と故郷喪失——ピエ・ノワールとしてのカミュ」『Becoming』18号（BC出版，2006年）
- 松浦雄介「ピエ・ノワールとは誰か——フランスの植民地引揚者のアイデンティティ形成」蘭信三編『中国残留日本人という経験——「満州」と日本を問い続けて』（勉誠出版，2009年）
- 渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮——文学的考察』（岩波書店，2003年）
- 渡邊一民「解説」梶山季之『族譜・李朝残影』（岩波現代文庫，2007年）
- 박홍규『카뮈를 위한 변명』（우물이있는집，2003년）